JAIR NEWSLETTER

日本国際政治学会

No. 14 February 1981

より良き学会をめざして

理事長 谷川栄彦

昨年秋の日本国際政治学会理事会において身に余るご決定にあずかり，細谷千博理事長のあとをうけることになりました。その責任の重大さを痛感しており，微力ながら全力を尽す覚悟であります。会員の皆さんにはこれまで以上のご指導・支援を下さるよう，この場を借りて改めてお願い申し上げます。

さて，わが学会も創立以来今年で25周年を迎えるが，その間，歴代理事長をはじめ会員各位の努力によって，大きな成長を遂げてきたことは周知の事実である。ことに細谷前理事長時代の４年間に，学会組織の整備や財政基盤の拡充が鋭意進められ，大きな成果を挙げた。

学会の会員数は現在1100名を越え，年間予算は1000万円余に達している。毎年春・秋の研究大会の開催はもちろん，会員の専門に従った研究分科会は19にのぼる。機関誌は創刊以来66号に達し，最近では年間３冊の発行をみるに至った。会員多数の力を結集した学会創立20周年記念特集号《戦後日本の国際政治学》は，わが国内外の反響を呼び，その英語版が米国コロンビア大学から出版されることになっている。また，会員相互間のコミュニケーションの緊密化を図って1977年４月に創刊された《ニューズレター》も，現在では14号を数え，そこでは多彩な編集上の工夫も凝らされ，その目的を果たしているように思う。さらにはわが学会は，アメリカ国際政治学会（ＩＳＡ）及びイギリス国際政治学会（ＢＩＳＡ）と密接な交流関係をもち，優秀論文を交換し，各機関誌への掲載を行っている。

このようにわが学会は着実な発展を遂げてきたが，より良き学会をめざして，さらなる努力が必要である。ひたむきな拡大の後に，しばし組織の内部点検と内実化へ注意を傾けることもまた大切であろう。この意味での重要課題の一つは，組織の膨脹に併って陥りがちなその動脈硬化や，運営のマンネリ化を防ぐことである。それにはまず，会員の種々な批判や要求を積極的に汲みあげ，生かしていくことが大切である。ニューズレターの会員投稿欄や会員へのアンケート調査の充実も，その方法であろう。１月にはアンケート調査を実施する一方，２月には運営委員と東京の若干の会員で，研究大会や機関誌等に関する反省座談会を開くことを計画している。また，理事会と運営委員会の密接な協力のもとに，理事会の一層活発なイニシアティブを期待したい。それには，理事会での討議時間が従来かならずしも十分でなかったように考えられるので，春の理事会からは研究大会の前日に開催し，十分な時間を割いて万般の審議を尽すことを考慮中である。

研究大会については，激動する世界情勢や日本外交の重要課題を反映した共通論題が提起されてきたことは周知の事実であるが，一方でその報告に散漫化の傾向があるとの批判も耳にする。肝に銘じ，その是正を図りたい。研究分科会については，それぞれの活動に積極性の差がみられる反面，新規分科会の開設要求もあるので，分科会の全体的再編成を考えなければならないであろう。他方，機関誌をとおしての書評活動も，昨年来，機関誌編集委員会の附置機関として書評小委員会が設けられて，鋭意進められようとしている。しかしながら，財政上の理由もあって，その成果を機関誌上で存分に問い得ない状況にある。

最後に，学会の組織の拡大と活動の多様化に併って，事務局体制の整備・充実が必要なことは言を待たないが，一つの大学で業務全般を担当してゆくことは困難であり，その有機的分散化が避けられない状況にある。このような事態に対処するため，事務局を従来どおり一橋大学に存置しながらも，業務の内容に応じた分室体制を採り，分室相互間の緊密な連携のもとに事務局の運営に当っている。

より良き学会への飛躍のために，会員各位のこれまで以上のご鞭撻・協力を切にお願い致したい。

学会事務組織図

理事長 谷川栄彦
副理事長 川田侃

運営委員会
学会運営の全般に関する審議
〔谷川栄彦(主)・川田　侃(副)・細谷千博・小林幸男・関　寛治・永井陽之助・福田茂夫・武者小路公秀・平井友義・宇野重昭・池井　優・大畠英樹〕

企画・研究委員会
全国的な会員間研究組織の統括・推進・国際会議の企画
〔細谷千博(主)〕

研究分科会
日本外交史〔大畑篤四郎〕，東アジア国際政治史〔宇野重昭〕，ヨーロッパ国際政治史〔平井友義・百瀬　宏〕，東アジア〔中嶋嶺雄〕，ソ連・東欧〔木戸　蓊・西村文夫〕，東南アジア〔長井信一〕，アフリカ・中近東〔浦野起央〕，アメリカ政治・外交〔有賀　貞〕，国際統合〔中原喜一郎〕，トランス・ナショナル〔馬場伸也〕，国際政治経済〔山本　満〕，政策決定〔渡辺昭夫〕，システム・リンケージ〔織　完〕，安全保障〔佐藤栄一〕，数量政治〔山本吉宜〕，平和研究〔高柳先男〕，ラテン・アメリカ〔G.アンドラーデ〕：他に研究分科会に準ずる研究会

編集委員会—書評小委員会
機関誌の企画・編集および発行
〔平井友義(主)・石川一雄(副)・有賀貞・臼井久和・西原　正・初瀬竜平・吉村道男・渡辺昭夫〕

ニューズ・レター委員会
ニューズ・レターの企画・編集および発行
〔池井　優(主)・小此木政夫・波多野勝〕

交換論文審査委員会
ＩＳＡ・ＢＩＳＡとの交換論文の選考

会計部
予算の作成等会計業務全般に対する統括
〔宇野重昭(主)・滝浦幸子〕

事務局
研究大会開催に関する業務
機関誌，ニューズ・レター，アンケート等の発送業務
各委員会との連絡，その設営等の調整，補助業務
ＩＳＡ・ＢＩＳＡその他との対外交流関係業務
会費関係業務
各種問い合せの処理その他
〔大畠英樹(主)・志鳥学修(副)・野林　健(副)・生島佳代子・山田裕子〕

新名誉会員（1980年10月１日就任）

名誉理事　板垣与一

新理事・監事（1980年10月１日～1982年９月30日）

理事　有賀　貞，池井　優，石川忠雄，宇野重昭，臼井勝美
内山正熊，浦野起央，衛藤瀋吉，大畑篤四郎，大畠英樹
緒方貞子，岡部達味，神谷不二，川田　侃，木戸　蓊
小林幸男，高坂正堯，佐藤栄一，関　寛治，谷川栄彦
永井陽之助，中嶋嶺雄，馬場伸也，平井友義，福田茂夫
藤井昇三，細谷千博，松本三郎，宮里政玄，武者小路公秀
百瀬　宏，山極　晃，山本　満，蠟山道雄，渡辺昭夫
（全35名）

監事　坂本是忠，高橋通敏，吉村健蔵　（全３名）

研究分科会の近況

国際社会学研究会

馬　場　伸　也（津田塾大学）

非国家的行為体の国際的な活動に興味を持つ研究者が集まり発足した，本研究会も，今年で四年を経過しました。

研究会は，津田塾大学国際関係研究所において，ほぼ二ケ月に一度の割合で開催しております。奮って御参加下さい。また，御報告等の御希望がありましたら，下記の事務局宛御連絡下さい。

以下は本年十月から来年度二月までの活動報告及び予定です。

1980年10月４日（土）
　大畠英樹氏（早稲田大学）
　　「国家中心的モデル」批判をめぐって
11月２日（日）国際政治学会秋季大会分科会
　佐渡友哲氏（日本大学）
　　「インドシナ難民受け入れに対するＮＧＯの活動」
　石川孝樹氏（横浜市国際交流課）
　　「自治体の国際交流―横浜市の場合」
12月６日（土）
　志島学修氏（武蔵工業大）
　　「軍事技術の国際移転」
1981年２月
　佐藤幸男氏（中央大学）
　　「国際組織とリージョナリズム」

民国史研究会

山　田　辰　雄（慶應義塾大学）

民国史研究会は発足以来研究会を重ねてきている。

1980年３月22日　山田辰雄（慶應義塾大学），「国民党史研究の意義について」
――５月25日　横山宏章（明治学院大学），「民国史と政治力学」
――７月７日　姫田光義（中央大学），「民国史の時期区分」
――９月８日　久保亨（一橋大学），「南京政府の関税政策とその歴史的意義」
　　嵯峨隆（慶應義塾大学），書評。

本研究会の当面の課題は以下の通りである。
(1)中国国民党歴次全国代表大会の検討。
(2)民国史関係文献の収集と紹介，目録の作成。
(3)会員の個別研究の発表。

東京地区院生研究会

東京地区院生研究会幹事（1981年）が，下記のごとく決定しました。

稲田真乗（早稲田），岩脇一成（成蹊），菊地努（一橋）倉沢富平（明治），波多野勝（慶應），平野優（日大），宮前志保（津田），なお連絡は波多野

学会活動報告（1980年７月～12月）

７月５日　1980年度第２回運営委員会の開催
８月10日　新評議員候補者全 314 名の選出（評議員候補者選考委）
８月12日　同候補者への就任要請状の発送
９月４日　新評議員全 308 名確定（９月１日就任）
９月10日　新評議員による新理事・監事互選の開始
９月27日　同開票（選挙管理委）
９月29日　新理事当選者全35名・監事全３名への就任要請状の発送
10月５日　同確定（10月１日就任）
10月31日　1980年度第３回運営委員会の開催
11月１日～２日　1980年度秋季研究大会の開催（於　中央大学）。大会出席者約300名，懇親会出席者約110名
11月１日　1980年度第２回理事会の開催。新理事長に谷川栄彦，副理事長川田侃の両会員を選出（11月１日就任），新入会員全34名を承認
11月１日　同第２回総会の開催
11月１日　機関誌「国際政治」第65号（1980年度第２号）「社会主義とナショナリズム」，第66号（同第３号）「変動期における東アジアと日本」の発行，配布
11月２日　同第２回編集委員会の開催
11月２日　同第１回書評小委員会の開催
11月28日　維持会員を対象とする1980年度第２回懇談会の開催（於　竹橋会館）。講師：岡部達味（東京都立大学），テーマ「中国の近代化をめぐって」
12月22日　同第４回運営委員会の開催
12月27日　第３回海外交換論文選挙の第１段審査開始（～81年１月31日）

（大畠英樹）

海外留学記

N. カロライナ大学再訪

今 村 文 治（中京大学教授）

ノース・カロライナ大学（The Oldest State University, chartered in 1789）の Visiting Scholar として，今年の７月から約70日間，非常に短期間ではあるが，チャペル・ヒルに滞在した。チャペル・ヒルは1973年同大学大学院のサマー・セッションに出席して以来，２度目の訪問であった。

自然の環境を完全といっていいほど残こす広大なキャンパス，ダウンタン，そしてアメリカの友人たちの親愛は７年前と何も変っていなかった。変っていたのは，大学全体の活気が欠けていたことである。1973年の夏といえば，ベトナムからの帰還学生たちのためにも数多くの講座が開かれ，ヴァージニア大学，デューク大学からの学生を含めて，約８千人収容できるドーミトリーは満員であった。しかし，活気がうすれている理由は，それだけではなさそうである。

チャペル・ヒルへ訪れた目的は，同大学の A. M. スコット教授から“アメリカ外交政策の決定過程”について指導を受け研究することである。同教授は，“The Anatomy of Communism,” 1951, “Congress and Lobbies : image and reality,” 1966, “Readings in the making of American Foreign policy,” 1965, など数多くの業績がある。また，“The Functioning of the International Political System,” 1967 は，『国際政治の機能と分析』1973，と題して原彬久教授が翻訳されている。同教授から指導していただいたテーマは，アメリカにおける議会と大統領の政策作成関係についてであり，具体的には“戦争権限法”1973，の成立過程の研究であった。

その他，新進学者の E. E. アザル教授から，“The Codebook of the Conflict and Peace Data Bank” というユニークな研究を教授されたし，７年来の友人である J. W. ホワイト教授から，日米両国の政治制度についていろいろな意見を聞くことができた。同教授は日本語が非常にうまく，日本語の講座を担当されると同時に毎週金曜日夕方，日本人学生を含めたＮＨＫ（日本語を話す会）が開かれている。同教授は，日本語にも翻訳されている“Sokagakkai and Mass Society”という大書があり，このオリジナルは教授の学位論文でもある。

◇機関誌70号『冷戦期アメリカ外交の再検討』（仮題）原稿募集について

第二次大戦後の外交関係資料の公開はアメリカでは最も進んでおり，50年代の資料も多く利用できるようになりました。本号では利用できるようになった資料を活用し，冷戦期のアメリカの対外政策の特定の側面について新たな光をあて，新たな解釈を提示するような諸論文をもって特集を組みたいと思います。

すでに何人かの会員に依頼しておりますが，一般の会員の方々からも応募論文を頂戴したいと存じます。論文は400字×50枚以内（注を含む）。論文の締切りは1981年10月末日です。応募原稿は下記にお送り下さい。またお問合わせも下記にお願いします。

〒
電

◇書評の募集について

書評小委員会では，会員からの書評希望や書評すべき本の推薦あるいは直接投稿を常時受付けています。又，著作を出版された場合には，是非本委員会宛お送り下さい。とりわけ若手の会員諸氏には，書評欄を筆ならしの場と考えて紹介と批判を競って下さるよう期待しています。

ただし，スペースの制約，企画の都合，質への配慮などにより，ご希望に添えない場合や注文がつく場合がありますが，その点あらかじめご承知おき下さい。

原稿枚数は，400字で７枚～15枚です。書評論文は30枚です。

連絡先：

会員の声

若手研究者にとって，大会での研究発表の場が与えられることは，大きなはげみになる。はげみがあればそれだけ意欲もわき，発表内容も意欲的なものになる。決して成熟した内容ではないとしても，荒けずりな中にも，注目すべき将来性をくみとることができる。であるから，発表を聞いただけでは物足らず，ぜひ活字にして，読んでみたいという発表も少なくない。

では，そうした意欲的な研究発表が，学会機関誌に掲載されているであろうか。どうも，そうとはいえない。大会発表と機関誌発表はどうも連動しているようには思えない。現在の機関誌は企画が先行し，大会はそれとは別のものとなっている。

企画が先行するのは，販売政策上やむおえないであろう。また１編は，統一テーマとかかわりなく，自由論文が掲載されることになった。そうしたことを承知のうえで，ひとつ検討していただきたい。すぐれた大会発表を機関誌に掲載するシステムを確立できないものだろうかということを。また，大会そのものが統一テーマで行なわれる場合は，それを機関誌に連動させることは容易であろう。

そうなれば，若手にとってよりはげみとなり，研究水準は高まるであろう。また，統一テーマのもとでおこなわれる「顔見世興業」的シンポジウムで，応々にして見られる無責任な発言も少なくなるのではなかろうか。

ある日の学会運営委員会

運営委員と一般会員の参加による。

機関誌の編集

A　現在は〈特集〉形式をとっているが，自由投稿をとり入れていくべきではないか。

B　応募があれば編集委員会で審査するが，最近はあまり例がない。現在は機関誌が年３回発行態勢にあるので，自由応募論文用のワクとして３本分用意しておりますが……。

C　〈特集〉のテーマをもう少し長期的に検討し早目に提示してはどうか。そうすれば研究プランの参考になるのでは……。

D　従来の編集には地域的偏差があったのではないか。

C　テーマを決めてから編集担当者を決めるという従来の方式を逆にしてみるのもいいのでは……。

ニューズレター

A　年四回発行の現行体制は好評である。理事長・編集主任も交替したことだから，巻頭言をトップにもってくる形式にとらわれずに新しい工夫をしてはどうか。

B　院生研究会の紹介，外国人研究者シリーズなどはどうだろうか。

C　外国人研究者の提言，学会メンバー間の情報交換（新設学科，講座の教員募集など），その他，人脈・地脈を乗り越えた学会活動に貢献してほしい。

研究大会・学会費

A　研究大会のテーマを早く決めてほしいという要望がある。早くから決定しておけば積極的な内容となるだろう。

B　従来，春季大会のテーマは12月の会合で，秋季大会のテーマは７月の会合で決っている。確かにもう少し早くてもよい。但し，アップ・ツー・デイトな題材を選定するには困難な面がある。

C　分科会と有機的に結びつけることも大切である。またパネル数を増すのもよいのではないか。

B　米国の研究者はオーガナイザーとしても熱心だが，日本の研究者は消極的だ。前回の大会（中央大）は成功だった。若手研究者に口頭発表の機会が少ないので，研究大会でその場を与えるように努力してきた。しかし前々回（九州大）の大会では多すぎたので，前回（中央大）では是正した。こうした試行錯誤を繰り返している。

D　学会費についてはどうか。

A　幅広く見返りがあるのだから，値上げもやむをえないという意見もある。

E　大会の開催日の設定について，他の学会との接続の都合上，土・日曜日に開催するという慣行に不満をもっている人もいるようであるが，土・日曜日以外の開催も可能なのだろうか。

B　いつも理事会で問題になるが，現実には困難な面が多い。

C　理事会で何が話されているのか。そのような点について風通しをよくしてほしい。

研究分科会

A　研究分科会をどのように発展させていくべきだろうか。会員の把握，学会との関係などに困難さが伴うが……。

B　私の参加している分科会なども，バラエティーに富んだ人が多数参加しており，地方参加者が多いため，対策に苦慮している。

A　地方の会員については，たとえば大会を利用するとか，あるいは分科会を時には地方で行なうなどするべきだろう。

C　積極的に活動している分科会とそうでない分科会があるようだが……。

D　なにか共同プロジェクトを組むようなことをしてみてはどうか。ただ，それに関係する人たちばかりが中心を占めてしまうのでは問題である。

学会名簿

A　もっと詳細な内容の学会名簿を作成する必要があるのではないか。

B　研究分科会の名簿もないところがある。

C　取り組んでいる研究テーマが何であるのかを含めた詳細な名簿を一度作成してみる必要があるだろう。

A　事務局でも検討してみたい。

戦後のわが国における外交史・国際政治史・研究地域・研究国際政治理論研究の発達を回顧し，特徴と問題点を指摘し好評を得た『**戦後日本の国際政治学**』を会員に限り特価2,400円でお分けします。ゼミなどでご利用下さい。
申し込みは学会本部まで。

会員による新著（昭和55年8月まで，未完）

斎藤鎮男『国際連合の新しい潮流』新有堂，79年5月
川田　侃『国際関係の政治経済学』日本放送出版協会，80年4月
川田　侃・三輪公忠編『現代国際関係論』東大出版会，80年4月
星野昭吉『国際政治―紛争と平和のダイナミズム』新評論，80年4月
田中直吉・元川房三編著『現代国際関係論』東海大学出版会，80年4月
K・E・ボールディング（武者公路公秀訳）『紛争と平和の諸段階』ダイヤモンド社，80年4月
今川瑛一編『70年代アジアの国際関係』アジア経済研究所，80年2月
宮内邦子『クレムリン悪魔の賭け』ごま書房，80年5月
武者小路公秀『地球時代の国際感覚』TBSブリタニカ，80年6月
V・フェレーロ（伊平健一訳）『権力論』小峰書店，80年6月
江口朴郎『世界史における現在』大月書店，80年6月
中西　治『中国とソ連』日本工業新聞社，79年11月
フランソワ・ミッセン（塚本一也訳）『地獄からの証言―ソ連のアフガン支配の内幕』サンケイ出版，80年7月
F・W・ディーキン，G・R・ストーリィ（河合秀和訳）『ゾルゲ追跡』筑摩書房，80年6月
山田辰雄『中国国民党左派の研究』慶應通信，80年6月
伊藤昭一郎『イタリア共産党史』新評論，80年5月
岸田純之助編『日本の将来を読む』学陽書房，80年7月
J・R・タウンゼンド（小島朋之訳）『現代中国―政治体系の比較分析』慶應通信，80年6月
M・ドルーロヴィッチ（高屋定国，山崎洋訳）『試練に立つ自主管理―ユーゴスラヴィアの経験』岩波書店，80年5月
宮脇岑生『アメリカ合衆国大統領の戦争権限』教育社，80年5月
市川正明編『日韓外交史料第八巻　保護及併合』原書房，80年7月
野田宣雄編『二〇世紀のヨーロッパ』有斐閣，80年7月
S・ゴリャコフ，V・パニソツスキー（寺谷弘壬監訳）『ゾルゲ―世界を変えた男』パシフィカ，80年8月
衛藤藩吉ほか編著『日本の安全・世界の平和―猪木正道先生退官記念論文集』原書房，80年8月
百瀬　宏『北欧現代史』山川出版社，80年8月

事務局ニューズ

新入会員

編集後記

松本三郎前編集主任の海外留学に伴い，主任の大役をお引受けすることになりました。会員数1000名を越え，機関誌『国際政治』の発行，年2回の大会の開催，海外との交流など日本国際政治学会の地歩が完全に固まった現在，本ニューズ・レターの果す役割も少なからぬものとなって参りました。

編集主任の交代を機に紙面構成を一新してはとのアイディアも出たのですが，今回は理事長以下の交代もありオーソドックスなところに落着きました。皆様のご協力を改めてお願いいたします。　（池　井　優）

ニューズ・レター委員会では，会員の皆様からのご投稿をお待ち申し上げております。
200字詰原稿用紙で，「巻頭言」（8枚），「海外ニューズ」（6枚），「海外留学記」（4枚），「資料センターめぐり」（4枚），「新著余滴」（4枚），「会員の声」（2枚）で，横書でお願いいたします。

昭和56年2月25日　発行
日本国際政治学会
ニューズ・レター委員会
〒108 東京都港区三田2―15―45
慶應義塾大学法学部池井優研究室内
発行人　谷川栄彦
編集人　池井　優
印刷所　梅沢印刷所